

# アートと見る人をつなぐ「アート・ピクニック'95」

ミュージアム・シティ・プロジェクト

山野真悟

LANDSCAPE FUKUOKA



都市景観とは何か?

最近、「街の中のアート」展とか、「パブリックアート」と呼ばれる種類の作品設置の例が全国的に増えてきている。それはまちを構成する要素のひとつとして美術を有効に生かそうとする立場と、もつと美術を身近に楽しむことができるようにしようという考え方が合致してできたものといえるが、最近のさまざまな事例は将来への大きな可能性を感じさせるとともに、まちと美術を結びつけることのむずかしさもまた、あらためて示しているようだ。

私たちの実行委員会組織「ミュージアム・シティ・プロジェクト」でも1990年から2年に一度「ミュージアム・シティ・天神」のタイトルで1カ月間、福岡市内の公共の場所や商業スペースなどの屋内外に作品を設置する、文字どおりの「街の中のアート」展を続けている。その際、私たちが最も気にかけるのは、特に美術作品を見ようとする意識のない人たちとどうやって接点をもつか、ということである。パブリックアートの場合、よい作品が適切な場所に置かれたというだけで果たしてその展示が完了したことになるのかどうか、見る人に働きかけるそれ以上の何かがあるときには必要ではないのか、という問いは私たちにいつもつきまわっていた。

そんな意味も含めて、私たちはアーティストと見る人が直接出会うためのワークショップ「アート・ピクニック'95」を企画し

た。対象を子どもたちに限定せず、おとなも参加できるようにしたのは、もちろんこれが両方に必要なことだと思ったからだ。あるいはこういう試みを最も必要としているのはアーティスト自身ではないか、という気持ちもあつた。今回は6つのクラスと空き時間に遊ぶクラスをひとつ設け、それぞれ担当のアーティストと話しあひながら、制作やゲームを進めるようにした。

当初の計画では、参加者が作品の制作と展示を経験することを重視していたが、プロジェクトのスタッフがポルドー現代美術館の視察や水戸芸術館におけるニューヨーク近代美術館の研修などに参加した結論として、必ずしも作ることは重要ではないと思いついた。ゲームや遊びの要素の多いクラスを後から設定することになった。

ワークショップは2日間、午前中から夕方近くにおよんだ。制作のクラスは着ぐるみやオブジェを作ったり、共同制作をした。巨大な自転車を組み立てて駐車場遊ぶクラスや、ビデオカメラを使ってゲームをするクラスがあり、また写真のクラスは天神へ撮影に出かけた。空き時間はシンプルなヴァーチヤル体験ができる装置で遊んだ。

約200名の参加者の反響は主催する私たちにとって予想外に大きかった。実はこれ程楽しんでもらえるとは思ってもしなかった。おとなも子どもも制作やゲームに熱中し、そ

山野真悟（やまの・しんご）  
1950年生まれ  
I・A・F芸術研究家  
ミュージアム・シティ・プロジェクト  
事務局員

「註1」

ミュージアム・シティ・天神  
これまで90年、92年、94年の3回開催された。福岡市中央区天神を主会場とする都市型の美術館。第1回展は53作家の作品を大小とりまぜ約1300か所に展示したが、第2回展以降、海外からの招待を含む10名程度の作家に限定制作を依頼し、それを展示する形態に変わった。96年10月に第4回展を開催予定。  
第7回福岡市都市景観賞特別表彰受賞。

「註2」

アート・ピクニック'95  
96年11月11日、12日の2日間福岡ポートを会場におとなと子どもを対象とした美術のワークショップとして開催された。その後、天神地区のデパートなど計14か所で作品と記録の展示をおこなう。また併せて美術の教育プロジェクトに関するシンポジウムを開催した。

れが参加予定ではなかった両親や見学者、スタッフまでも巻きこんでいった。私たちにとつても初めての試みであり、多少の出来不出来はやむを得ないと思っていたが、参加者の熱気が多くの欠点を隠してしまつた。終了後のアンケートで最も多かったのはもう一度やってほしいという声であり、私たちはこういう企画がどんなに必要なものであつたかを今さら痛感している。

「アート・ピクニック」の経験で私たちは、これまで需要があつたにもかかわらず、供給されることのなかつた分野があることに気がついた。それは単にワークショップだけではなく、アートと見る人をつなぐためにこれからさまざまなシステムや方法が形成されていかなければならない分野である。今回のように見る人とアーティストが直接出会うことも、お互いの距離を縮めるひとつの方法であり、それはそのどちらにも効果をもたらず、と思われる。

多くのパブリックアートはできあがつてしまえばそのまま放置されるという運命をもっているが、これは結局見る人を放置していることと同じ意味ではないだろうか。

アートと見る人の新しい関係によって、新しいパブリックアートが生まれるなら、そのためにも、つねに見る人との関係をつくり続けていく作業がこれから大きな比重を占めるだろう。



撮影＝廣橋 毅 山田 智史

- ① オリエンテーション
- ② 会場入口の看板と装飾
- ③ 「船ぐるみで遊ぼう」クラスの作品展示  
(岩田 隆)
- ④ 「天神を写す」クラスの作品展示  
(天神コア)
- ⑤ 「キッドMCT」クラスの作品展示  
(天神ビブレ)
- ⑥ 「キッドMCT」クラスの作品展示  
(新天町プラザ)
- ⑦ 「遊め！メディア少年少女」クラスの風景
- ⑧ 「巨大人力球登場(白走人力式)」クラスの  
作品試運転
- ⑨ 「巨大人力球登場(白走人力式)」クラスの  
作品展示(天神地下街)
- ⑩ 「船ぐるみで遊ぼう」クラスの風景
- ⑪ 「キッドMCT」クラスの制作風景
- ⑫ 「トントナン・セパンジャン・ハリ  
(一日中やってもよ)」クラスの制作風景

